

昔むかし、あるところに、年とったブタがいました。子ブタが三匹ありましたが、貧しくて、みんなにじゅうぶんに食べさせることができませんでした。そこで、自分で幸せを見つけるようにと、家から出しました。

最初に出かけた子ブタは、わらたばを持った男の人に会いました。子ブタは、

「おじさん、そのわらをちょうだい。家を建てるんだ」といいました。男の人は、わらをくれました。子ブタはそのわらで家を建てました。

しばらくすると、おおかみがやってきて、ドアをたたいていいました。

「子ブタ、子ブタ。おれを入れてくれ」

子ブタは答えました。

「だめだめ。これっぽちも、だめ」

すると、おおかみがいいました。

「それなら、ふう、ふうと吹いて、おまえの家を吹き飛ばすぞ」

おおかみは、ふう、ふう、と吹いて、家を吹き飛ばして、子ブタを食べてしまいました。

二番目に出かけた子ブタは、ハリエニシダのたばを持った男の人に会いました。

「おじさん、そのハリエニシダをちょうだい。家を建てるんだ」

男の人はハリエニシダをくれました。子ブタはそれで家を建てました。

しばらくすると、おおかみがやってきて、ドアをたたいていいました。

「子ブタ、子ブタ。おれを入れてくれ」

「だめだめ。これっぽちも、だめ」

「それなら、ふう、ふうと吹いて、おまえの家を吹き飛ばすぞ」

おおかみは、ふう、ふう、ふう、と吹いて、家を吹き飛ばして、子ブタを食べてしまいました。

三番目に出かけた子ブタは、れんがをたくさん持った男の人に会いました。

「おじさん、そのれんがをちょうだい。家を建てるんだ」

男の人はれんがをくれました。子ブタはそれで家を建てました。

しばらくすると、おおかみがやってきて、ドアをたたいていいました。

「子ブタ、子ブタ。おれを入れてくれ」

「だめだめ。これっぽちも、だめ」

「それなら、ふう、ふうと吹いて、おまえの家を吹き飛ばすぞ」

おおかみは、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、と吹きました。けれども、どうしても吹き飛ばすことができません。そこで、おおかみは、いいました。

「子ブタ、おれ、いかぶの畑を知ってるよ」

「どこななの？」と、子ブタはききました。

「ああ、スミスさんの畑だよ。明日の朝、用意して待ってれば、むか迎えに来るよ。いっしょにかぶを取りに行こう」

「いいね。待ってるよ。何時にする？」

「ああ、六時にしよう」

つぎの朝、子ブタは五時に起きて、かぶを取ってきました。おおかみは、六時にやってきていいました。

「子ブタ、用意はできてるか」

子ブタは、いいました。

「できてるよ。とっくに行つて帰つてきた。おなべにいっぱいかぶを取ってきたよ」

おおかみは、とても腹を立てました。けれども、なんとかして子ブタをつかまえようと思って、こういいました。

「子ブタ、おれ、いいりんごの木を知ってるよ」

「どこななの？」

「メリー農園さ。もし、おれをだまさないなら、迎えに来てやるよ。五時に来るから、いっしょにりんごを取りに行こう」

つぎの朝、子ブタは四時に起きて、りんごを取りに出かけました。おおかみが来るまでに帰つていようと思つたのです。けれども、メリー農園は遠かつたし、それに、りんごの木に登らないといけません。それで、ちょうど子ブタが木から下りようとしているとき、おおかみがやって来るのが見えました。子ブタは恐くてたまりません。おおかみは、近づいてきていいました。

「なんだ、子ブタ、先に来てたのか。そのりんごは、おいしいかい」

「うん、とつても。ひとつ、放つてあげるよ」

子ブタは、りんごをひとつ、遠くへ放り投げました。そして、おおかみがひろいに行っているあいだに、木から飛びおりて、家に走って帰りました。

つぎの日、おおかみは、またやって来ていいました。

「子ブタ、今日のお昼から、シャンクリンのお祭りまつりで、お店がたくさんなら並ぶんだ。行くかい？」

「うん、行くよ。君は、何時に行くの？」

「三時だな」

子ブタは、また時間より早く出かけました。そして、お店でバターを作るおけを買いました。ところが、うちへ帰ろうとしていると、丘の下からおおかみが出て来るのが見えました。子ブタは、どうしていいかわからなかったのです、おけの中に隠れました。そして、中でおけを転がすと、おけは、子ブタを入れたまま、丘を転がり下りていきました。おおかみは、びっくりぎょうてんして、家に逃げて帰りました。

おおかみは、子ブタの家にやって来ていいました。

「丘の上から、なんだか大きな丸い物が転がってきて、そりゃあ、恐かったよ」  
すると、子ブタはいいました。

「ははあ。じゃあ、君は、ぼくを恐がったんだな。ぼくは、お祭りに行つて、バターのおけを買つたんだ。そしたら、君がやって来るのが見えたので、おけの中に隠れて、丘を転がり下りたんだよ」

おおかみは、とつても腹を立てて、

「おまえを食べてやる。えんとつから下りていってつかまえてやる」といいました。

子ブタは、水をいっぱい入れたなべを暖炉のかぎにかけて、火をぼうぼう燃やしました。ちょうどそこへ、おおかみがえんとつから下りて来ました。子ブタが、なべのふたを取ると、おおかみは、なべの中に落っこちました。子ブタは、さっと、なべにふたをして、おおかみを煮て、晩ご飯に食べてしまいました。

それからのち、子ブタは、いつまでも幸せに暮らしましたとさ。

村上郁再話